

げんかとなった時。もう、こんなんやっつけられるかー、ロッカーをガシャーンと締め、エレベーターのボタンを押して、帰ろうとした。しかし、そこでふと冷静になり、考えたのです。僕が帰ったら患者はどうなるんだ、と。僕が怒ったりケンカして、不利益を被るのは患者さんなのです。僕のところに来る患者さんたちは、僕が見放してしまうと、代わりに行く病院もないし、代わりに診てもらうドクターもいないんですね。人に謝るって、勇気があることだけど、何日も何日も僕が来るのをずっと待っていてくれる、そうした患者さんのためになら謝ることはわけない。そういうのが本当の勇気だと思う。もう一度手術着に着替えなおして手術室に戻り、『オレが悪かった、手術をさせてくれ、シンロイ、シンロイ』と頭を下げた。その時から怒らなくなりましたね」

—「赤ひげ」と呼ばれていることについて、ご自身ではどのように感じていますか。

「実際には白髭となってきていますが、貧しい方々を治療することに遠慮することなく、時として金銭を肩代わりをしても、病気を治したいと思う医師としての使命に燃えて、患者さんに対応する姿が、昔の“赤ひげ先生”にちなんだそのように呼ばれているのかもしれませんが。悪くは思っていません」

—また「一匹狼」とも呼ばれていますが。

「一匹狼というのは特別な言葉。一匹で生まれてきて、自分の生きる

べき道を探す。道のないところに道を造る、とてもやりがいのあること。ベトナムでは Hung 先生以外にも、僕の DNA を受け継いでくれる若い先生が何人か出てきました。とても嬉しいことで、やっとこれまでの活動が実を結んできたのかなと思います。そういう人たちのためなら、どんどん支援してゆきたい。彼らのためなら特別な機械もお金を惜しまずつぎ込んでゆくつもりです」

—服部先生の DNA を受け継ぐ人とは、どんな人ですか。

「素晴らしい技術を後世に伝えていくことと、貧しい人で治療費が払えない場合でも、なんとか治したいという仁愛の心をもって、金銭に惑わされることなく、治療に専念すること。そんな DNA がアジアの若い医師達にどんどん受け継がれていけばと願っています」

#### ●プロフィール 服部匡志(はっとり けいし)

1964年大阪生まれ。フリーの眼科医。父親の入院中、心無い医師に浴びせられた言葉がきっかけとなり、「自分が患者の痛みをわかる医者になる」と決意。京都府立医科大学卒業後、日本各地の病院で経験を積む。2002年よりベトナム国立眼科病院で内視鏡を駆使しての網膜剥離や糖尿病網膜症などの最先端の治療、指導を始める。その技術は世界トップレベルで誰もが認める凄腕。ベトナムでは報酬をいっさい受け取らず、日本で稼いだアルバイト代で旅費、滞在費、治療費などをまかなっているため、「赤ひげ先生」と呼ばれることも。2005年に外務大臣より感謝状が贈呈される。2006年に宮沢賢治の「イーハートブ賞」受賞。2007年にベトナム保健省より「人民保健記念章」を受章。

6月9日のチャリティーイベントで、服部医師と出合った盲目の落語家、桂福点さんから寄せられたはなし

## ヒューマンハンド

本番前日、面会の約束をしたホテルの部屋の前で、私は“いかにも学者”というような眼科医の登場を想像して立っていました。これは子供の頃から、眼科をはじめいろいろと通院を繰り返した私自身の経験が作らせたイメージだったのでしょう。しかし、開いたドアからは、想像とは全く異なる穏やかな声が聞こえてきたのです。「お会いできてうれしいです」。深みのある独特なイントネーションで話される先生の言葉は、知性の海から汲み上げられる水のように心の奥深くまで流れ込んだのです。桂福点治師匠が障害者の弟子を取り、手話落語を作り出したことに服部先生は感動され、ご自身の活動についても話されました。「治るとわかっている目を治すのは当然なことだと考えています。お金の問題ではありません。名誉や富でもなく、それができる手を私が人間として使うだけです。これが神から与えられた私の仕事なのかもしれません」とおだやかに話されました。

日本なら保険適応で視力を取り戻せるような手術も、ベトナムでは経済的に受けられない人がある。そんな人達に無料で治療を行うため、私財をなげうっての先生の活動に中途失明者の私は感動をおさえられませんでした。神の意志を受け取り人間の手を通し行われるオベは、神と人のコラボレーションによる限りなく敬虔な世界なのだと感じました。

翌日の本番では、当初予定していた演目を変更し、全盲の私がなぜ落語の道に踏みこんだかについて話すことにしました。それによ

って、視覚障害者の暮らしや目に障害を持つことへの理解を少しでも広げられないかと考えたからでした。前座の持ち時間を大幅に超え、怒られることを覚悟で舞台を下り師匠の前に立つと、師匠は「福点、これでよかったんやで」と笑みを浮かべて言ってくださいました。パーティーの席で服部先生は私の手を堅くにぎられ、「ありがとう、こんなに気持ちのこもった芸は初めてです。本当にうれしいです。涙が出てしまいました。必ずまた会いましょう」と言葉をかけてくださったのです。ふと先天性緑内障で入退院を繰り返した私のために、保険がきかない治療費を無理しながら払い続けた父母を思い、涙がにじみました。

ベトナム戦争の被害は今なお人の体と心を蝕んでいるといいます。このベトナムの地で服部先生の手によって開かれたたくさんの瞳が、平和の大切さを見つめ、未来に希望の光を生み出すにちがいない、そうであってほしいと私は強く願っています。



服部医師(左から2人目) 桂福点さん(右から2人目)